

俳句雑誌

空



2020・3

SORA 89号

空

令和2年3月31日発行

第18巻1号

通巻第89号

福岡 あさなが捷

手袋の指の必ず余りけり
賑はひに入りきれない葛湯吹く
母の指示末だ聞こゆる年用意
定位置に四隅正しき初暦
次々に酒注がるる年男

太宰府 西住三恵子

霜晴や筵を広げて焼餅屋
渋柿を映してゐたる道路鏡
秋天より鉄の恐竜ふり返る
風あれば風の色なり紅葉山
玄海の沖のふくらむ霧笛かな

糸島 小林朱夏

初風呂やしみじみをかし己が臍
大根の首押し上ぐる大地かな
早春の川定まらず蛇行せり
争ひて片目となりぬ恋の猫
立春や都府楼跡に紙飛行機

福岡 秋津 令

どこからも波の音して秋祭
秋風や更地になれる商店街
秋灯し仏の父と向き合へり
病室の母の寝息や冬ぬくし
それぞれの唇に合ふ冬林檎

福岡 田代貞香

大地より湧き出て風の秋櫻
悔しさは言葉に出さず万年青の実
庭の柿色づきてゆく夫は亡し
障子閉めいよよ一人と思ひけり
田仕舞を終へたる風が吹き渡る

粕屋 吉田 律

行き倒れ祀る石ころ草紅葉
地芝居の声返し来る棚田かな
火の玉のごとき柿の実村眠る
上流に河童をります芋車
銀杏散る石垣高き百姓家

長崎 松尾龍之介

一人逝き二人逝きコスモスになる
放屁虫詩囊は直ぐに空つぽに
豊の秋蚯蚓の糞のピラミッド
アカペラの月光たりし十三夜
秋うらら気球はさかさまの雫

兵庫 林 徹也

稲藁の茶毘に加ふる捨案山子
行倒れはた落人か捨案山子
卒寿鋤く畝がまつすぐ秋高し
新しき杉玉よぎる秋燕
香煙を赤子に掬ふ小六月

千葉 原 友 子

海見ゆる病室釣瓶落しの日
七五三むかしカメラに黒頭巾
藁塚の影がうとうとしてゐたる
秋蒔きの種の原色鴉鳴く
煮大根グルタミン酸イノシン酸

直 方 石 橋 幾 代

剥製の鳥の目は銀天高し
背中よりまづ暖むる焚火かな
牧小屋を囲みてゐたる花芒
一つ跳びあと身じろがぬ寵馬
しこしこと帳簿夜なべの塩むすび

須 恵 苑 実 耶

一人居や雛に見立つる茹で卵
手術痕見せ合ふ湯殿春隣
あたたかや九十才の語る夢
春一番青の洞門吹き抜くる
うららかやハスキーボイスの新生児

東 京 山 田 正 子

生家とは束の間の家流れ星
銀漢やガラスの檻の昇降機
秋の虹もとにもどらぬ砂時計
月青しフランス映画見し後は
曼珠沙華束ねば炎ゆるかもしれぬ

兵 庫 青 木 朋 子

溪流に刺さる倒木台風禍
実を百個残し酸橘の枯れにけり
月明の坂のぼりゆく子ども山車
団栗を並べて絵本読みきかす
ギターでも買はうかと夫秋の夜

福 岡 山 内 碧

砂浴びに倦きし雀の蛤に
裏山に日の入る隙や冬の鵲
幾世代も動き無き村芋嵐
狐火を見しと言ひ張る真顔かな
冬日和初めて聞きし父の歌

北 海 道 押 田 裕 見 子

紅葉山仏の母へ供へたし
かんばせも声音も母似照紅葉
成敗の太刀ともならでやせ秋刀魚
嫁の任終へて秋茄子食しをり
軽やかな茶筌の音や冬ぬくし

直 方 吉 田 悦 子

母子手帳もらひし家路天高し
洗面の曲がらぬ腰や秋の雨
塩むすびふはりと握る運動会
枇杷の花母が遺影の話など
荒れ果てし畑にころがる南瓜かな

空集抄 柴田佐知子抽出

頭より木枯の中進みけり

田仕舞の煙が包む一揆の碑

啓蟄や振りてサクマのドロップ缶

林檎園祭のごとくりんご生り

寒鯉動く水を揺らさず濁らせず

極楽は青空ばかり赤のまま

鰯起し舳先揃ふる二百艘

マスクして帰れば犬に怪しまる

茜潮渡りの鷹の胸照らす

川床料理川床軋ませて運ばるる

新藁に仔牛の脚のもつれけり

高倉和子

松田明子

中田みなみ

戸栗末廣

岸 洋子

曾根富久恵

林 徹也

秋 千晴

深川淑枝

角野良生

永淵恵子

鳳仙花地べたの遊び忘れゆく

終りなきことも寂しき秋の潮

竜宮へひと泳ぎせし飾り亀

冬瓜の憚りも無く売れ残る

椿の実ゆるゆる過ごすにも力

彼の人は思ひ出すのみ星月夜

皮一枚むかれ白磁となる根深

秋の蜂玻璃にぶつかり丸く死す

茹で玉子上手に剥けて文化の日

姫に附く大人六人七五三

秋潮やささくれ立ちし能舞台

秋蛭母の淋しさ今にして

これからを生きぬく為の日記買ふ

山本則男

山内 碧

吉田 菫

原 友子

石橋幾代

仲里奈央

苑 実耶

河原敬子

田岡千章

三井所美智子

大西乃子

西住三恵子

田代貞香



鰯干す腸海へ流しては

スキップしたき診療結果秋の空

身に入むや職退きて乗る通勤電車

「おい若造」と喜寿を叱りぬ生身魂

冬日影千本鳥居の朱に染まる

うなづくも返事のひとつ風邪寝の子

髪洗ふ否応無しの五十肩

秋耕の鍬のひと振り日を弾く

たとふればジオラの音色金木犀

明治より時打つ時計秋の昼

もの干され音なき浦曲冬隣

体内に埋めたる異物冬の朝

晩学は躓き易し郁子熟るる

井上和子

岩下きぬ代

森田明成

織田高暢

むつみ蓮

兒玉充代

吉田悦子

星加鷹彦

早田保子

村上二三

えとう樹里

小林朱夏

横田敬子

牛の仔の生まれし朝の霜柱

桐下駄の鼻緒緩みて柿日和

病院で食ぶる赤飯文化の日

初冬や霧立ちのぼる沼の朝

戦争と平和の狭間西瓜切る

ピンヒールにて歩きたき星月夜

鳥渡るリハビリ室の広き窓

畔道に捨てられてゐる大根葉

暮れそめし水を押し切る鴨の胸

踏切の供花新たなり秋の暮

金色の水に鳴き合ふ夕千鳥

大寒や誕生を待つ牛舎の灯

尻餅をついても一人大根引

あさなが捷

小島翠波

矢野綾子

石川子熊

松尾康代

後藤園子

田口萬智子

青木朋子

本多トミ

村上典子

押田裕見子

荷宮克代

立花一枝



空集作品評

柴田佐知子

頭より木枯の中進みけり

高倉 和子

風に向かつて歩いてゆくとき、どうしても前傾になる。上五に〈頭より〉と置いたことで、冷気の固まりのようにぶつかってくる〈木枯〉を体感する。下五の硬質な措辞〈進みけり〉も的確だ。

田仕舞の煙が包む一揆の碑

松田 明子

徹底した写生眼を持つ明子さんの作品。秋の収穫の作業を終えた喜びと安堵満ちた地に一人で吟行されたのだろうか。俳句は短い。十七音から季語を除くと使える言葉は僅かだ。大景の中から何を取り出すかにかかってくる。この景に立てば、〈煙〉と〈一揆の碑〉は見えるだろう。とはいえ見えたものを並べただけでは、ああそうですかとしか言いようのない句になる。

言葉の構築で、景と自分が感じたものを伝えなくてはならないのだ。掲句は〈田仕舞の煙〉と大きく捉え、一息に〈一揆の碑〉へ焦点を絞り込んでいる。〈包む〉の措辞の力だ。たとえば〈流るる〉であれば、ここで取り上げなかったであろう。

ごく普通の言葉が静かな調べで組み上げられているのだが、切り取られた景の断面は、追いつめられた農民が決死の思いで押し寄せていった一揆の土煙をも想像させられる奥行を持っている。

極楽は青空ばかり赤のまま

曾根富久恵

句は極楽図を見て作ったわけではないだろう。そう思えるのは配された秋の花〈赤のまま〉によるものだ。〈赤のまま〉はままごと遊びの子供が花をしごきとって赤飯に見立てた犬蓼の花のことである。この句には、澄んだ秋の空を見上げたときに、直感したことを迷いなく詠んだと思える強靱さがある。それにしてもまるで見てきたかのような〈極楽は青空ばかり〉の断定だ。そういわれると極楽は青空が似合う。なんでも断定すればいいわけではないのは当然だ。このように人を納得させる力があってこそその断定であることを付け加えておこう。

空集

柴田佐知子選

頭より木枯の中進みけり

福岡 高倉和子

横顔の車窓に歪む寒さかな

枯野ゆく月の列車となりにけり

片側に移されしごと鴨群るる

呼び止めてみたき力士や冬うらら

折りやすき枝より折りて夕焚火

流木も石も売られて日脚伸び

兄弟で結びの一番宮相撲

熊本 松田明子

宮相撲立合どれも潔し

火吹竹ころがつてゐる芋煮会

築茶屋を包みて余る水の音

田仕舞の煙が包む一揆の碑

招かれしごとく田に寄る稲雀

啓蟄や振りてサクマのドロップ缶 東京 中田みなみ
はるかぜや装ひたくて増やす試歩

小綺麗な猫が客呼ぶ桜餅

春風のめくるページに豪華船

アオザイの裾割る春の波止場風

テープ切る船を残して春の雁

うす雲のひろがる秋の更衣

広島 戸栗末廣

湧き水の音ふんだんに真葛原

林檎園祭のごとくりんご生り

初鴨のこゑに濁りのありにけり

地玉子の殻の厚さや冬に入る

水音に震へてをりぬ帰り花

百人の僧の摺り足凍てつる

福岡 岸 洋子

冬の雲海まで馬柵の伸びてをり